
バカと魔法少女と召喚獣

野中つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと魔法少女と召喚獣

【Nコード】

N1161Y

【作者名】

野中つかさ

【あらすじ】

明久はいつもの様に教室に入ると、ある違和感に気づいた。「あれ？ あんな子この学校にいたっけ？」何と、昨日話したばかりなのに、今日は文月学園主催の体験授業だったことを忘れていたのだった！ クラス分けてFクラスになる鹿目まどかと美樹さやかと、ようやく二人と打ち解けた暁美ほむらはAクラスに行った。そしてAクラスがFクラスに戦闘態勢に入っていることに明久たちは気づいた！「Fクラスって、皆、元気だね……」（by桃色ガール）

バカとテストと召喚獣 の世界に 魔法少女まどか マギカ のキ
ヤラ達が乱入！ 一体どんなハチャメチャ展開が始まるのか！？

バカと中学生と体験授業

「それじゃ、見滝原中学の体験授業は決定さね」

「それは良いのですが……別に二年生全員ということにしくとも良いのでは？」

「それでも良いんだけどね、最近バカジャリ共のせいで、学園の評判は駄々下がりだ。高橋先生も知っているだろ？」

「ええ」

「一人でも多く、この学園に来るためには一気に興味を引かせる方が、効率上がるさね」

「なら受験生の三年生を狙えば良いじゃないですか」

「三年生だと、進学する学校を決めている奴は多いからね。ここに進学する奴も多く来るとは限らない。勿論、三年どもにも対象に体験授業は開くさ。けど、それだけだと安心できないからねえ。保険をかけた方が良いと思ったのさ。まだ進学する高校を決めていない二年に体験授業をさせて、この学校に興味を引かせる。この学校で受験する奴は三年と比べて格段に上がるはずさね。それと、興味がりゃ、人気も勝手に上がるさね」

「なるほど。そういうわけですか。確かにそれは効率は良いですね」

「わかったかい？ それじゃ、明日に見滝原中学にこちら側から二年用と三年用のテストを送る。体験授業の期限は明後日の火曜から金曜までだ。明日のHRにでも学園の二年どもに教えてやりな」

「わかりました」

雲ひとつないどこまでも続く青空。夏が終わり、紅葉がハラハラと道端に落ちていく。秋だと実感させる季節がやってきた。

「秋だねえ……」

空を見ながら秋をしみじみと感じていると、見慣れた友人の後ろ姿が見えた。

「おはよう、秀吉」

「明久か。おはようじゃ。今日は早いろう」

毎度お馴染み、見た目はどこからどう見ても、女の子そのものだけど、戸籍上は何故か男で、爺言葉で話す、少し風変わりな友達の木下秀吉だ。Fクラスの中では多分、一番の常識人だと思う。

「今日はちよつと早く目が覚めてね。やることないから早く出てきたんだ」

「そうか。お主の姉上はどうしたのじゃ？」

「最近の仕事が立て込んでるみたいで、朝早くから出て行ったよ」

「お主の姉上も大変じゃの」

「うん。それに今週は遅くなるらしいし」

それに最近仕事が多いせいか、あまり会話が出来てないのも少し寂しいことは秘密。

そうだ！ 来週には姉さんの好きな料理でも作ってあげようかな。別に今月は月末までテストはないんだし。

「よ、明久に秀吉」

「……………おはよう」

後ろから声をかけてきたのは、背が高く、少し細身に見えるけど、ボクサーみたいな体つきをして、小さい頃、神童と呼ばれていたらしい僕の悪友の坂本雄二と、いつも盗撮、盗聴を趣味にして女子の

写真を撮ったりするムツツリスケベな土屋康太。皆からは、寡黙^{ムツツ}なる性識者と呼ばれている。裏ではムツツリ商会で、撮った写真を売っている。勿論僕も常連である。

「おはようじゃ、雄二にムツツリーニよ」

「おはよう、雄二。ムツツリーニ」

「珍しいじゃないか。明久がこんな時間に学校に来るとは。嵐の前の静けさってやつか？」

「失礼な。ただ朝早くおきて暇だったただけだよ」

いつもの友人たちと和気藹々と雑談しながら学校に入った。

HRの予鈴が鳴り始まるなり、鉄人……もとい、西村教諭の姿が現れたと思った矢先に、出席をとり始めた。出席を取り終えて、すぐに今日の報告をする。

「明日から今週の金曜まで、見滝原中学校の二年生と三年生が、体験授業を受けることになった。わかっているとと思うが、勿論この教室も使う。お前等は一様先輩だ。妙な行動は慎み、授業態度はきちんとするように」

そう告げて、鉄人は教室から出て行った。

うーん……これじゃ、授業中に寝ることが出来ないじゃないか。それにしても……

「ねえ、雄二。普通体験授業って、中学生は中学生で別でやるんじゃないの？」

「ほお、バカな明久でもそこまでわかるとは、流石にそこまでバカ

「じゃなかったか」

「バカって言うな！」

中学の頃、体験授業なんかには出たことないからわからないけど、中学生と高校生は習うところが一切違うはずだ。だとしたら、一緒に授業を受けるのは難しいと思ったただけだ。

「授業範囲は大体中学で習ったとこの復習か、中学生向けの授業をやると思うが、確かに合同でやるのはおかしいよな。普通なら別でやる方が断然やりやすいはずだ」

「じゃあ、何で一緒に受けなきゃならないのかな？」

「中学生に高校生の態度を見習えってことじゃないか？」

「だったら、別にFクラスで授業をやるんじゃないかって、設備の良いAクラスとかで授業を受けたらいいんじゃないの？ 部屋も広いし」

「全員がAクラスとかに行ったら、あんな大きな部屋でも入りきらんだろ。それにここの学校はテストの点数でクラス分けをしてるだろ。自分の良し悪しを理解するためにな」

「あ、そっか」

「多分、その中学生共もテストを受けてるんじゃないか？ その点数でAからFクラスまで分けて、ようやく自分の頭の良し悪しを把握する。頭の悪い奴に、この学校のシステムが気に入ってるのなら大抵は勉強するだろう」

「そんなことせずとも、テストの点数で決めればいいんじゃないの？」

「そんなの、テストの結果を見ればわかる話だし。」

「本当にバカだな、お前……。この学校は学力の向上でこういう風になっているんだろうが。普通のテストだったら、やっても何もやる気にならないだろ。だからこの学校には試召戦争という勝負がある。」

テストの点数で、勝負が大抵は決まる。勝ったら、上位クラスだったら、そのままになる。下位クラスだったら、上位クラスと設備交換。負けたら、上位クラスは、下位クラスと設備交換。下位クラスは、ランクを一つ下げることになる」

「あーなるほど。勉強をして、絶対に上に行ってやるっていう闘争心を沸かせるんだっただね」

「まあ、そういうことだ。ま、それ以外の詳しい話は、明日になりやわかる」

「そうだね」

細かいことは明日、学園長らへんが教えてくれるだろう。いや、教えてもらう。

「お前等、席に着け」

区切りの良いところに丁度チャイムが鳴り、鉄人が入ってきた。

「今日は英語の先生は忙しいので、俺が授業をする」

これまた熱い授業になりそうだ。

バカと中学生と体験授業（後書き）

どうでしたでしょうか。素人ながらも書いてみました。話がわかりにくいと思いますが、読んでくださってありがとうございます。

まどか達は次の話で登場する予定です。

次回もお楽しみに！

バカとFFF団と鹿目まどか（前書き）

この作品は二次作品です。原作者以外のBOOKはNOという方、アニメ、原作を汚すんじゃないやねえよ！！て方、原作通りに進めるやゴルーア！！って方は直ちに回れ右をして戻るボタンを押して頂いたらあなたの家に妖精さん（38歳独身）をお詫びに遅らせていただきます（嘘）。それでも読みたい方はFFF団加入届けを出してください。

バカとFFF団と鹿目まどか

『異端者には討伐せよ！！！』

『『『おおー！！！！』』』

放課後。僕は今、異端審問会（討伐って言ってる時点で審問でも何でもない拷問集団）の連中から全速力で逃がっている。

どうしてもこうなっているかというところ、話が長くなるんだけど、簡単に言えば

「止まれ！お前が中学生の女の子と一緒にデートをしていたことは調査済みだ！」

単に迷子だった女の子と歩いただけでこの始末。恐ろしすぎる想像力だ。むしろ尊敬できるかもしれない。

「だから誤解なんだったってば！僕は迷子の女の子と一緒に友達を探してただけじゃないか！」

走りながら一生懸命弁明するけど

『言い訳は聞き飽きたわ！！』

まず、話を聞いてくれないから厄介だ。

でも、このままだといつ捕まってしまうか時間の問題だ。こうなったら、どうしても使いたくなかった最終手段を使うしかないか…

…！

……ええい！背に腹は変えられない！

「これでもくらえ！」

そして僕が投げたのは、ムツツリー二からなけなしの金ではたいて買った、美波と秀吉と姫路さんの写真をばら撒いた。

『何をす　ぬおおお！？』

FFF団の連中は、死ぬ物狂いで写真に手を伸ばしていた。よし！　どうやら食いついたようだ！

「いまだ！」

僕は全速力でその場から逃走した。……何だかFFF団の皆の姿が凄く哀れに見えた。

さて、商店街まで逃げてきたんだ。流石にあの連中も諦めてるだろ………と信じたい。でもここまで来なくとも、明日、また襲ってくるだろうし、対策練っておかないと、怒りの矛先の雨が明日中ずっと降りかかるだろうし……。

と、対FFF団用始末案を一人で練っていると、背中に誰かがぶつかったのがわかった。

「あ、すみません！」

と謝罪の声が聞こえて、僕は後ろを振り向いた。

「あ、昨日の迷子の子か」

ピンク色に染まって、ツインテールをしている。体系は小柄で、大体150センチ半ばって感じた。養子もかなり良い。その子は少し震えながら、僕の顔を覗くかのような上目遣いで見た。少し可愛い。

「つて、ダメだ、吉井明久。僕は何を考えているんだ！」
「？」

相手は小さな女の子だぞ！ 何ときめいてんだよ、僕！ 僕は口リコンじゃない！ そう、断じてない！ でも中学生だから大丈夫…… なわけないだろう！ 何でこんな感情が出てきて…… そうか！ そう考えたらこの感情につじつまが合う！
僕は少し顔を傾けている彼女に面向かって言い放った。

「僕を殴ってください！」

「え、はい…… ええええ！？」

そうだ！ これは夢なんだ。そうじゃなけりゃ、この子の可愛いと思うこともなかるう。早く目を覚まさないと、色々ヤバイことになりそうだ。

僕が放った言葉に戸惑いを隠せない様子の彼女。

「ええと、どうしたらいいの……かな？」

何だか困っている様子の彼女。

あれ？ 何で僕の夢なのに彼女は言うとおりに動かないんだろう。あ、そうか。そういう考えの方が話が合う気がする。そうかそう

か……。

「ああそうか。僕、死んじゃったんだね……」

「どうしてそうなるの!？」

多分、走ってる途中にFFF団の連中に殺られたんだろう。記憶にはないけど。そう。これは夢さ。僕の人生の、天国からの送りのも

「えいつ!」

「ぬはあ!？」

と少し悲しみの思いに包まれていたら、殴られた。頬に。グーで。

「なに!？ どゆこと!？」

僕が今起こったことの現状把握が出来なくて混乱していると、彼女は親切に答えてくれた。

「あなたが死の淵に彷徨いそうだったので、悪いと思いつつも、攻撃しました」

あー、そういうことか。

「良かった。まだ僕生きてるんだ」

「凄い思考回路ですね……」

僕は改めて生きているという実感を感じていると、先ほどのことを思い出した。

「そついや、君、昨日の迷子の子だよね？」

「あ、はい。そうです。あ、そついえば自己紹介してませんでした。私、見滝原中学2年の鹿目まどかです。」

そついつて、鹿目さんはペコリとキツチリ90度まで頭を下げ、お辞儀をした。

「僕は文月学園2年の吉井明久。ごめんね、鹿目さん。さっき取り乱しちゃって。」

「大丈夫ですよ。ちょっと楽しかったですし。」

「それでいいの……かな？ あ、そうだ。鹿目さん、あの後ちゃんと友達と出会えた？」

「はい。ちゃんと待っていてくれました。」

「そうか。よかったね、鹿目さん。」

「はい！ ありがとうございます！」

いい子なんだなあ。ちゃんとお礼も言っし、いい子に育ってる。うちの姉とは大違いだ。

と関心していると、ふと疑問が遮った。

「そついえば、何であんなに急いでたの？」

普通人の背中にぶつかる事なんて、走ってるときぐらいないだろうし、何かに追われてたのかな？

「あの……実は、変な覆面を被った人達に話しかけられて……」

何だろう。凄く嫌な予感がする。

「私、怖くて、それで逃げたら、追われてしまっ……」

何だか、凄い罪悪感を感じてしまう。多分それって……

「見つけたぞ！ あの中学生だ！」

「でかした！」

「おい！ 隣に吉井もいるぞ！」

「何だと！？ あの野郎、またあの女の子に手を出そうとしているのか！ どうしますか、須川会長！」

「吉井明久と桃色ガール二名を直ちに捕獲し、吉井明久を処刑する！」

「逃げよう鹿目さん。とにかく全力で。全速力で」

「は、はい！」

鹿目さんがなみだ目寸前ながらも同時に走り出した。

「さて！ お前はどこまで女を増やせば気がすむんだ！」

「妬ましい！ ああ、妬ましい、妬ましい！！ 女に縁のある吉井が妬ましい……！！！」

「クロス……ヨシ……クロス……」

「x 5 # & a m p ; f ! 0 \$ L」、……！！！」

何か、異常なまでに嫉妬狂ってる！ 怖い！ 怖すぎる！ 捕まったら確実に殺されてしまう！

僕等はとりあえず、走りに走りまくって、丁度連中から死角にな

るそんな場所に隠れた。

「ん、明久。どうした、そんなに慌てて」

と思つた矢先に雄二に見つかる。

「今、FFF団に追われているんだ」

「何だ、またやらかしたのか明久……ん、誰だそいつは？」

鹿目さんと目が合った雄二は気になつて質問してきた。

「話は後！ また今度で！」

「まて明久」

雄二にガチリと方を捕まれ、まるで蔑む目で僕を見てきた。

「お前、とうとう少女までに手を出したのか？」

「大きな誤解だよ！！！！」

全力で否定する。

『おい！ こっちから声が聞こえたぞ！』

『奴等だ！ 追え！』

しまった！ 大きな声出してしまうって気づかれました！

「ええい、こうなったら！」

僕は鹿目さんの手をガッチリと握って、大きな声でFFF団に向けて言い放った。

「雄二って、本当に霧島さんとベタベタするの好きだね！」

「……はあ！？」「」

勿論、そんなことは雄二はできやしない。これも逃げれるための作戦だ。背に腹は変えられない。

思ったより効果は絶大で、FFF団の連中全員が立ち止まり驚いて、雄二も啞然として僕を見ていた。その隙に僕等は全速力でその場から去った。

『あ、明久！お前、根も葉もない嘘を言う　よ、よせお前等！俺は何もやましいことはしていない』

雄二……雄二の犠牲は、絶対無駄にはしない！！

……………。

とりあえず、明日学校で雄二に謝っておこう。

とりあえず、鹿目さんがわかる道まで送って、僕は一人ぶらぶらと帰り道を歩いていた。

「今日は大変だったな……」

本当に大変な一日だった。

何故か授業の担当の先生が全員変わってたし、FFF団に追われるし、おまけに雄二まで敵に回しちゃったし……。

「むしろ明日が大変だなあ……」

と、少し憂鬱な気分になりつつも、前向きに考えた。

そうだよ、明日にはあの連中は僕のこととは忘れてるさ！ 雄二に矛先が向いたから、多分大丈夫だろう。後は雄二に謝ればいいだけだよ。うん。正直、あんな奴に謝罪の一言も言いたくはないけど、今回は完全に悪いことをした。謝らないと雄二に悪い。僕の秘蔵コレクションでも上げれば許してもらえよう祈っておこう。別に雄二の反撃が怖いわけじゃないよ？ 本当だよ？

さて、もう夜遅いし、さっさと帰って寝るかな。

「明日も頑張ろう！」

自分に気合を入れて、家まで全力で走った。

バカとFFF団と鹿目まどか（後書き）

どうも野中つかさです。

今回はまどかも出演できました。

結構危ない感じになってきてますが、多分大丈夫でしょう。

次回は体験授業回です。

それでは、お楽しみに！

Fクラスと明久と試召戦争（前書き）

吉井「え？ 僕が読者に諸注意をしる？ ちよ、何で、ちよ、雄二！ 行かないで！ ……仕方ないか。えーと、この原稿を読めばいいのかな？ えー『今回も容赦ない二次作品です。原作者じゃないとやっつけられるか、原作を汚すな！』って方、原作通り進めましょうね、って方、二次作品やるぐらいなら、吉井明久に諸注意読ませるや！って方は』って、これかあ！ この最後の文のせいで読ませられてるのか！？ って、何雄二 ぶごあ！ べ、べつになくならなくてもあ……わかったよ……読めばいいんですよ。 えーと……『回れ右をしてすぐちにお帰り』……ん？ どうしたの、雄二？ うん……うんうん……あ、この漢字（直ちに）って、”すぐちに”じやなくて”ただちに”って読むの！？ 何か恥ずかしい！ えーと、『直ちにお帰りください。それでも読む方は、吉井明久に諸注意を読ませて笑いましょう』……おい！ そこ笑うな！！ くそおおおおお！！ このやろおおおおお！！」

Fクラスと明久と試召戦争

「今日も良い朝だな……」

雲ひとつない大きく澄み渡る青い空。全てを包み込んで、癒してくれそうな空。

「誰も天気の話はしてないぞ。吉井」

僕の前に浅黒い肌に趣味のトライアスロンで鍛え上げた筋肉が服の上から見てもわかる。そう。鉄人……もとい西村教諭である。

どうして僕が鉄人と対峙しているかというのと、いつもより早い時間に学校に来て、教室に入ったら、Fクラスの皆が見たことのない子達と話をしていて、雄二に事情を聞こうと声をかけたら、皆（F F F団全員と雄二）がこちらに振り向いて、殺気を感じた僕は一目散に逃げたら悪魔……いや、鬼と称してもおかしくない形相で追いかけてきた。そうしてたらいつの間にかチャイムが鳴って、鉄人に見つかり、僕以外、皆逃げ出して、校舎外まで逃げた僕は一人捕まり、そこで説教を受けているのだ。

「ったく……お前にはいつもいつも悩まされる。もう《観察処分者》という称号だけでは足りない気がするほどまでな」

「違うんですよ！ これは、Fクラスの連中が僕を殺しに掛かって来たから逃げてただけで」

「言い訳はいい。聞き飽きた。ったく……今日は中学校の体験授業だというのに、昨日あれだけ妙な行動派慎めと釘を打ったはずだが……一度、洗脳が必要かもしれんな……」

「先生。問題児に説教するのは文句ありませんが、洗脳するのだけはやめてください」

心からの文句であった。

こんな人間離れた妖怪男に洗脳なんてされた暁には、自分は死ぬ覚悟がある。

「冗談だ。そんなことができたら、最初からしている」

それもそうか。……え？ てことは、出来たらしてたの？

「さあ、さつさと戻れ。流石に1時間ずっと説教するほど、俺は暇じゃない」

「はい」

僕は鉄人のプチ説教から終えてそそくさ教室に戻った。

それで教室の前まで来て、どうやって入るか悩む。

今日から金曜まで4日間体験授業に来た中学生らと過さなければならぬ。だけど、さっきの騒動でもしかしたら悪い印象を与えてしまったかもしれない。やっぱり人間なんだから良い印象を持ってほしいと考えるもの。ならば、どうやって好印象になるような行動すれば良いか。

「ただいま！」

いや、そんなことをしたら、僕がこの教室に住んでるみたいじゃないか。ならば、これならどうだろう。

「おはよう諸君！」

僕は独裁者か何かか！ 違う違う！ 何でこんな風になっちゃうんだ、僕は！

……普通に「遅れました！」って言えばいいじゃないか！ 何で僕はこんな簡単な事を思いつかなかったんだ！ よし！ そうと決まれば！

僕はドアを開けて、

「すみませーん！ 遅れました！」

「さっさと座れクソバカ野郎が」

「台無しだっ！！」

既視感を感じたが、まあ、今は関係ない。というよりも誰だ！入ってきて早々毒舌吐いたのは！ って

「雄二じゃないか」

教卓の前にいたのは、いつも見慣れた悪友の姿だった。

「どっしてそんなとこにいるの？」

と言って、黒板に目に入った。そこには自習と書かれていた。

「理科の布施……先生が、さっき呼び出しで出て行ってこの時間は自習になった」

今、雄二らしくなく先生と呼んだけれど……あー、中学生がいるからか。

「そしてその自習の間に、今回短い期間の間、世話になる中学生の自己紹介を聞こうと思ってな」

「へー、雄二らしくないな。いつもならめんどくさがって、そんなこともしないで」

「今日は状況が違うからな。その話は自己紹介が終わったら話す」

状況が違う？ どういう意味だろう。

でも考えてもわからないと思ったので、さっさといつもの席に座った。

それを見ていた雄二は、周りを見渡し、皆を見て自己紹介を始めた。

「俺はFクラス代表、坂本雄二だ」

と簡潔に終わらせ、その場に座った。

「次はそのピンクのから自己紹介を始める。特技とかも付けてくられてもかまわんぞ」

「は、はい！」

あ、あの子、昨日の子じゃないか。何か、運命的な出会いというものを感じるな。ていうか、鹿目さんって、勉強苦手なんだね。と少し鹿目さんの登場と、昨日のギャップに驚きながらも、鹿目さんの方をみた。

鹿目さんは、少しおどおどした感じで立ち上がり、自己紹介を始めた。

「大丈夫だ。折れることなんて珍しくはない。あとでポンド持つてくるから自己紹介続ける」

と雄二が青髪の子にフォローを入れ、自己紹介を始めた。

「あ、見滝原中学から来ました。美樹さやかです。どうぞよろしく」
軽く笑顔だったけど、少しテンションがさつきより低かった。
大丈夫！ そんなこと、僕もたまにやるから！

と心の中でフォローを入れて、次々と自己紹介をしていく。自己紹介が終わり、雄二は立ち上がった。状況が云々という話をするのだろう。

雄二は少し強張った表情で口を開いた。

「体験授業で来た生徒は一樣この学校のシステムについては知っているな？」

中学生の方を見て、わかったように頷いた。

「じゃあ、一樣説明しとく。この学校はテストの点数で上下関係を決める。お前等もみたる？ Aクラスの設備。Fクラスとは段違いだ。でも普通じゃ、この設備を変えることはできない。だが、この学校は試召戦争で教室の設備で変えることが出来る。試召戦争っていうのは、試験召喚獣という、自分の分身みたいな奴で敵と戦い、相手の頭を倒せば、こちら側の勝利。敵の教室の設備を交換できる。ただし、それもルールがある。設備は上位クラスが勝利なら、そのまま変わらない。ただし、負けたなら、設備は勝ったクラスと交換。下位クラスが勝利なら、上位クラスと交換。負けたのならランクは一つ下がる仕組みだ。勿論、試召戦争に勝つのはお前等次第だ。勉強すりゃ、こんなオンボロ教室から脱出できる」

雄二がこの試召戦争について説明をする。眠ってる人がいるかなーと思つて、後ろを見てみたが、誰も寝ている人はいない。皆雄二の話に集中しているようだ。

「試召戦争を始めるには宣戦布告をする。宣戦布告したクラスとされたクラスは日時を決めて試召戦争を行う。その間は、他のクラスの宣戦布告を受けることは出来ない。戦争が嫌なら、宣戦布告から逃れるしかない。そしてここからが本題だ」

教室全体から、緊張している気がぐんぐん伝わってくる。

「Aクラスが、どうやらFクラスに戦争を始める体制をとっているらしい」

教室がざわつく。ちょ、どうしてAクラスがFクラスに戦争を始めようとするの？

「雄二。どういうことなの？」

「さあな。それがわかったら苦労しないんだがな。ムッツリーニが今調査しているようだ」

「……………今の所、原因不明」

ムッツリーニがそっくり、余計にざわつく。

「だからだ。何があつたか知らんが、試召戦争を今受けたら負けてしまうのがオチだろう。そこで試召戦争だ」

「え？ どういうこと？」

「時間稼ぎだ。試召戦争が終わつたら、次の日はテストになる。その間にAクラスに勝てるための戦法を考えておく。勿論、お前等に

も勉強はしてもらおう」

「じゃあ、どこに宣戦布告しに行くの？」

「Dクラスでいい。行ってこい。明久」

「って、あれ？ 僕が行かないといけないのは決定事項の？」

「ちょ、雄二！ 何で僕が行かないといけないのさ！」

「何だ？ 行かないのか？」

「前にあれだけの目にあっただから、行くなんていうわけないだろうが！」

「そうか。なら仕方ないな。おい、鹿目に美樹とやら。吉井について行ってくれないか？」

雄二の発言で一瞬で周りが殺気立つ悪の空間と化した。

「明久君。もし一緒に言ったらどうなるか、わかってますよねえ？」

成績はAクラス代表にも匹敵のするんじゃないかと言われるぐらいの点数を誇る姫路瑞希さん。容姿は普通の人よりも一つ上で、可愛いという言葉でピッタリはまる。性格も良いし、お嫁さんには持つてこいだ。

と、いうものの、今の姫路さんはどこかの悪魔よりも恐ろしい。

「アキ。わかってるわよね？ ウチを敵に回したらどうなるかって」

そしてドイツからの帰国子女の島田美波で、ポニーテールをしていて、姫路さんとは違う魅力がある。

そんなところにたまにひかれたりするけど、とても今はそう見えないうい。というか、今にも間接を曲げられそうな感じのオーラをまとっている。

でも、どうしてこんなに皆怒っているのか。理由はわかっている。おそらく、昨日の件だろう。

「あのー、私たち、行かない方がいいのかな……？」

美樹さんが僕に気を使うように言う。

「いや、一緒に行ったほうが良い。明久もそうしてもらいたいそうだし」

「雄二！ デタラメなことを言わないで！！」

雄二は僕を殺されるのも見たいのだろうか。見たいだろうな。こいつなら。

「いや、でも……そんな風に見えないし」

と、雄二は何やら溜めていたものを吐き出すように言った。

「そういや、明久が『今日も二人でイチャつけるぞ』とか何やら

「グッバイ！！」

『まてやゴルアアアアアア！！』

僕は全速力で教室を飛び出した。

「行っちゃった……」

「Fクラスの皆って、元気だね……」

「よし、鹿目とやら。今から宣戦布告に行くぞ」

「え、でも授業中じゃ……」

「大丈夫だ。別にいつ宣戦布告しようが問題ない」

「でも、どうして私だけ？」

「お前には話がある。明久と何があったかな」

「え、まどか……もしかして、吉井先輩と言えない様な仲なのお？」

「ち、違うよ！」

「だとしても、詳しく聞かせてくれ。明久の人生に関わる話だからな」

「確かに、そうなりそうね……」

「おし、じゃあ鹿目の保護者の許可も下りたところで、宣戦布告行くぞ」

「え、あ、待って！」

「……うーん、何か坂本先輩とまどかを見てると、親と小学校の娘に見えるわ……」

Fクラスと明久と試召戦争（後書き）

さあ、今回はどうでしたでしょうか？

何だか自分では面倒くさくなってるような気がしますけど、気のせい
ですよ。そう、気のせいです。

では、次回もお楽しみに！

バカテスト「英語」

次の英文を日本語に訳しなさい。

・ Do you think this movie is interesting?

姫路瑞希の答え

「あなたはこの映画を面白いと思いますか？」

教師のコメント

正解です。流石Aクラスの学力を誇る実力は衰えませぬね。

鹿目まどかの答え

「あなたはその映画を難しいと思いますか？」

教師のコメント

「その」の単語は”that”であり、”this”ではないですよ。

それと”interesting”は「興味を起す」、面白い「という意味です。

単語の”difficult”の「難しい」と間違えたのですか？もしそうならこの機に覚えておきましょう。

吉井明久の答え

「あなたはこれ」

教師のコメント

どれですか。

土屋康太の答え

「これは映画」

教師のコメント

そうですね。私は映画だったのでですか。

バカテスト「英語」(後書き)

皆さん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。

僕はどちらかという学力は低い方なので、もしかしたら間違っているかもしれない。

間違っていたら報告くださいませ。

魔女と魔法少女と美樹さやか（前書き）

おっす！ おら、前書き！ こんかいも諸注意書くぜ！

お前ら！ この作品には二次つていうもんがある！ つまり！ 作者じゃない奴が書いたんだ！ それが嫌なら帰った方がいいぜ！
それも見たい奴は見ていったらいいと思っぜ！

魔女と魔法少女と美樹さやか

「ふう……助かった……」

危うくFFF団に捕まって処刑されるとこだった……。

とりあえず、無我夢中で校外まで逃げ出したから、後で先生の説教待ちかぁ……嫌だな……説教……。

と、未来のことを考えて滅入っていると、何か凄い違和感を感じた。

「なんだろう」

顔を上げると、さっきまでであった町の風景ではなく、天変地異の謎の空間に僕は立っていた。

何だ、この物凄く気持ちの悪い空間は……。

今まで味わったことのないこの感覚に怯え、ここから逃げ出そうと走る。

とりあえず、ネガティブになったら、死ぬってよく言うから、今までであった良い思い出を思い出そう。

そういえば、小学校の入学式は嬉しかったなあ……あの時はランドセルが背負えるっただけでも嬉しかったし、本当に今でもこの感情を覚えて……

「って、これじゃあ走馬灯みたいじゃないか!」

こんなことを考えててもダメだ! とにかく、この空間から逃げることを考えよう。

「っ! 殺気!」

よっしゃ！　どうやら効果抜群のようだ！

ビリリイ！！

ダメだアアアア！　すぐに破られたア！　ていうか、何ていう人だ！　人類の宝石とも謳われる聖典を破り捨てるなんて！
つて、そんなこと考えてる暇じゃなかった！　早く逃げないと！
と走り出したら、落ちていたバナナを踏んでしまい、こけてしまった。

「クウウ！　僕の人生はここで終わるのか……！」

父さん、母さん、それと姉さん。僕を大事に育ててくれてありがとう。僕はもう、心置きなく、

「死んでたまるかあああああ！！！」

僕はまだまだやり残したことがいっぱいあるだ！

と、僕が大きく叫んだせいか、巨人のおばちゃんは驚いた様子だった。その矢先に

「うりゃあああああ！！！」

誰かの掛け声と友に、巨人のおばちゃんは悲鳴を上げて、その場で消滅した。

それと同時に天変地異の空間は消え去り、いつもの町に戻ってい

た。

「え、ええと……」

今の状況に少し戸惑っていると、ここにはいないはずの子がいた。

「み、美樹さん？」

そう。そこには学校のFクラスにいる筈の美樹さやかさんが居た。

「大丈夫ですか？ 吉井先輩」

手を差し伸べてくれたので、その手を借りて僕は立ち上がった。

「うん。だいじょう僕は何も見ていない何もしていない」

「せ、先輩？」

美樹さんの格好がいつもの制服ではなく、胸を隠す青い鎧……胸当てって言うんだっけ？ それと、胸当てに白いフリフリシャツを着ていて、少しおへそが見える。その上に宝石みたいなのがはまっている。最近流行っているお洒落なのだろうか？ 青いスカートを着ていて、青色が似合いそうな彼女の特徴を良く出している。

この格好でも結構露出してるから、少し照れくさい。というか、こんなところをFFF団の誰かに見つかったら、僕よけいに変態疑惑かけられないかな!？

「美樹さん！ 早くそれ脱いで！」

「え、ちよ、何言ってるんですか、吉井先輩!？」

あれ？ 僕変なこと言った？

「だから、その格好で一緒にいられると……」
「あー、そういうことか。わかりました」

と、彼女が言うと、美樹さんの体が光り出し、彼女らの通う中学の制服の姿に戻っていた。

「え？ どういうこと？」

そう。目の前で変な服から美樹さんの通う学校の制服に戻ったのだ。初見でみたら摩訶不思議この上ないだろう。

「あー……えーと、驚きませんか？」

「え、あ、うん」

何だろうか？

「私、魔法少女なんです」

多分、今年最大の驚きだろう。

魔女と魔法少女と美樹さやか（後書き）

こんかいは少し中途半端な終わり方になってしまった気がしますん。
それでは、次回もお楽しみに！

バカテスト「国語」

次の四字熟語ついて答えなさい。

「四面楚歌」

? 意味を答えなさい。

? この四字熟語を使い、文章を作りなさい。

姫路瑞希の答え

? 周囲を敵や反对者で孤立し、助けや味方がいないこと

? 私は学校で成績優秀であったが、周りが四面楚歌だったことに気づいた。

教師のコメント

正解です。故事による四面楚歌とは、項羽が垓下^{がいか}という場所に漢軍に追い込まれ、項羽は夜更けに四面に囲む漢軍が楚の歌をうたうのを聞いて、楚の兵達は降伏したと思い、絶望したというもの。そこから敵や反对者に囲まれ孤立した状態のことを「四面楚歌」というようになったそうです。

島田美波

? 四面から歌が聞こえること

? 会場の中は合唱で四面楚歌だった。

教師のコメント

合唱団の歌声が聞こえたりという意味ではありません。

吉井明久の答え

? 全身の間接をキめられること

? 僕が秘密にしていたことがバレてしまい、四面楚歌になった。

教師のコメント

意味が間違っているのに、文章があっていることに本当に腹立だしく思うのですが、何故か本当にそんな気がして恐怖を感じます。

バカテスト「国語」(後書き)

皆さん、Good morning、Hello、Good evening .

今回は国語です。姫路さんの文章の答え間違っていないか心配です。

成績悪いですからね) . . .)

間違っていたら、ご報告お願いします。

魔女と走者と地獄の鉄拳（前書き）

木下優子「何よ秀吉。そんなに慌てて。え？ 早くこの台本を読め？ どういうことよ。あーうるさいわね。わかったわよ。言えばいいんでしょ？」この作品は二次ちゃくひん」……オホン。えーと、
「この作品は二次作品です。原作での設定はある程度ありますが、
気に入らない人もすくにやからず」……そこ！ 笑わないで！ 何
よ噛んだくらいで……『少なからずいると思います。そういう方は
お戻りになってください。それでもよい方は本編をどうぞ。（by
秀吉）』……秀吉。お姉ちゃんとお話しましょうか。そんな蒼白な
顔で抵抗しても無駄よ。さあ、二人でお話しましょうね……！！」

魔女と走者と地獄の鉄拳

美樹さんから聞いたかぎりではわかったことは、キウウベえと言う謎の生物が願い事を叶えてもらえる代わりに、魔女を倒すという取引で、魔法少女になるらしい。

話を聞く限りでは、少しいまい話がすぎる気がするけど、まあいいか。そこは僕が気にするところじゃない。

第一の問題は、美樹さんの事だ。

「美樹さんは、どうして魔法少女になったの？」

願いの代わりに、魔女を討伐するという恐ろしいこと、普通じゃ出来ると思えない。僕もさっきの騒ぎで魔女の恐ろしさを理解を得ていた。だから気になるのだ。美樹さんがどうして魔法少女になったのかを。

「あ、ええとですね……」

どうやら言いにくい事情でもあるようだ。こんな様子で聞き出すのは失礼だろう。

「あ、大丈夫だよ。無理に話さなくても」

「あ、そうじゃないんです！ ただ、少し話すのが恥ずかしくて……」

なるほど、願い事は他人に言いふらすものでもないし、それが、他人に聞かれたくない願いなら尚更だろう。

「別に無理強いでして知りたいわけじゃないよ。言える時が来た

ら言っつて」

「あ、ありがとうございます」

少し頬を染めた笑顔で言ってくれた。うん、可愛い。

「あ、そういえば、さっきの魔女からグリー……グリー……」

「グリーンフードですか？」

「そうそれ。それって落としてたの？」

一様説明は聞いたけど、どんな形かは知らない。

「はい。これです」

と、美樹さんはポケットから、黒い奇々怪々な物体を取り出した。

「これが……」

すこし戸惑ってしまう。僕が予想してたのは、黒くて鶏の卵ぐらいの大きさの物かと思っていた。それとは違い、少し複雑なつくりになっていて、感心させてしまうところもある。

「これと同じようなものが魔女が持つてるんだよね」

「そうです。これがないと、私たちにとっては死活問題ですけどね」

魔法少女にとっては、食事を取るのと同じぐらい大事な物らしい。これがないと、ソウルジェムが濁って、魔法の威力が下がってしまっらしい。

「大変だね」

「はい。でも私にとっては、目指したい目標がありますから」

多分、美樹さんの先輩のバマミさんのことを言っているだろう。

「それじゃ、そろそろ学校に戻ろうか」

「そうですね。じゃあ戻りますか！ 吉井先輩！」

彼女は生き生きとした表情で学校の方へ走り出した。

「僕も行くか」

僕も美樹さんについていくように走っていった。

「酷い目にあつた……」

僕と美樹さんは、校門のところで鉄人に見つかり、生徒指導室に連れていかれ、説教を延々と感じるぐらいまでされた。もう拷問の域だった。

僕はともかく、美樹さんは鉄人の説教はさぞかし辛かったろう。いや、僕も結構辛かったけどさ。

「死ぬかと思いましたよ……」

「そうだよね……あんな延々と続くような説教の後に英文で謝罪して……もうあれ、処刑にされてるのと同じだよ……」

「そうですね……はは……はあ……」

どうやら相当やられているらしい。まあ、仕方ないか。初めてだもんね。鉄人の説教地獄。

「早く戻って休もうか」

少しでも安眠ぐらいして身体を休めないと、持ちそうになかつ

『どうだ！ 吉井は見つかったか！？』

『いや！ 見当たらない！』

『クソ野郎！ 一体どこに逃げたがった！』

このままでは永眠することになってしまふ。

「美樹さん。こっちの廊下は忙しいみたいだから、他の階から行くか」

「え、別にいいですけど……」

どうやらこっちから行かないことに疑問を抱いてるようだ。そりゃそうだ。こっちの方が近いからね。彼女は悪魔のロードということには気づいてない様子で「まあいいか」と言い無理やり納得させるような感じだった。

「それじゃ、行こうか」

僕は真横にあった階段から降りようとすると

『見つけたぞ！ 吉井だ！』

「ヤバイ！」

僕は美樹さんの手を掴み、階段を駆け下りた。

「わわ！ どうしたんですか、吉井先輩！」

『今の声、見滝原中学の美樹さやかの声だよな！』

『あのクソったれはとうとう中学生まで手を出したか！』

『あのクズ野郎からさっさと解放させてこれからの人生は俺たちで育ててやろう！』

「吉井先輩。逃げましょう。全力で」

どうやら彼女の危険値センサーにも事の恐ろしさに気づいたようだ。

僕の中で今までにないぐらいまでの危険値センサーが自分の中に鳴り響く。捕まったら、殺される。

『待てや吉井！ さやかちゃんから手を離せや！』

『さやかあああ！！ 君が俺が守ってあげるよおおおお！！』

「ひひひひひひひひひひ！！！！！！」

これまでにない恐怖を感じ、全力疾走で走った。体力？ んなもんあってもなくてもこんな危険な状況で構ってられっか！

「どっしする……どっしする僕！」

必死にFFF団から逃げるための作戦を考える。

ダメだ。どこをどう探しても死にか直結しない。

「こんなところで……死んでたまるかあ！」

今捕まったら、僕が死ぬだけではなく、美樹さんもFFF団の餌食になるだろう。ムツツリ商会がらみで。

「貴様らあああああ！！何をしているかあああああ！！！」

と、FFF団の後ろから聞き慣れた野太い声を放つ鬼、鉄人が来た。

「『『『!?!?』』』」

皆の体が振るえ立ち止まり、皆同時に後ろを向いたら、ずっと向こうに鉄人が物凄い形相（まさに鬼神）で追ってきた。

「『『『ひiiiiiiii!!』』』」

一斉に皆が走り出した。またあんな悪魔、いや、鬼神に捕まったら、次は死ぬ！絶対死ぬ！

とにかく僕は美樹さんは、これからの人生走れなくなるんじゃないかってぐらい命がけで走った。

「貴様らああ！！今日という今日は許さんぞおお！！！」

僕ら（僕＋美樹さん＋FFF団）は鉄人との競争をチャイムが鳴るまでやっていった。

「もうダメ……」

僕は卓袱台に身体を任せて寝ている。正直、もう動きたくない。

「死ぬかと思った……」

「だ、大丈夫だった？ さやかちゃん……？」

僕の席から少し斜め横にいる鹿目さんが僕と同じようにしている美樹さんを宥めようと頑張っている。

鹿目さんの声は思った以上に癒されて、少し楽になる。

ついでに、僕以外にも全員この体制をしている。

こんなことになっていないのは、美波と秀吉と姫路さんと雄二と鹿目さんだけだ。

「まったく、どうしていつもこんなにへばってるのよ……」

美波が僕の前に来て呆れた声で言うてくる。

「仕方ないじゃないか…… FFF団の連中が勘違いして追ってくるから……」

「勘違いさせるようなことをしているのは明久君じゃないですか」

と、姫路さんが入ってきて、反論される。

「別にそんなことしてないけどな……」

「明久君には自覚がないだけです」

「そうよアキ。瑞希の言うとおりよ」

と二人に攻められる僕。もう二人相手に反論できる力は残ってない。

「別によいではないか。いつものことじゃろつて」

と秀吉も入ってきて僕のフォローを入れてくれる。

「まあ、そうだけどさ……ねえ、瑞希」

「え、あ、はい。そうですね……」

ん、どうしたんだろう。急に美波と姫路さんの齒切れが悪くなっ

た。
(お主らの気持ちはわからんでもないが、少しは休ませておいた方が
良い。本当にしんどい感じじゃからの)

((で、でも！))

(昼休みが終わったら、試召戦争がある。そのために体力は戻し
ておいておきたい。これで良いかの?)

((うう……))

小声で話してたから全然話は聞こえなかったけど、美波と姫路さ
んは自分の席に戻った。どうやら上手くまとめてくれたようだ。

「ありがとう。秀吉」

「別にかまわぬ。これも友人のためじゃ」

秀吉は本当に良いお嫁さんになるだろうな。

と、雄二がそろそろいいかと言うような顔で立ち上がり、教卓の前に行った。

「お前ら。体力が消耗しているところで悪いが、今日の昼休みが終わったら、試召戦争を行う。相手はDクラス。昼休みが終わるまでには体力は全快にしとけよ。作戦は開始直後に説明する」

雄二はそれだけを言い、下がった。

ついでに、今は授業中だけど、自習時間になっていた。プリントが配られて、この時間の担当の先生はそそくさに教室を出た。昨日から殆ど担当の先生の授業を受けていない。何かトラブルでも起きたのだろうか。

と、雄二が僕のところに来て、僕の耳元で呟いた。

(明久。4限が終わったら、ババアのところに行くからお前もこい)

(え？ どうして?)

(お前もみてわかるだろう。この様子)

(まあ、確かにおかしいとは思っけど……)

(何かワケありみたいだからな。ババアに問い詰める)

(オーケー。わかったよ)

まあ、気になってたから、暇があったら話を聞きに行こうか悩んでたところでもあったしね。

雄二は僕から離れて、自分の席に戻った。何か今日は大変だなあ

……。

魔女と走者と地獄の鉄拳（後書き）

皆さんGuten Morgen、Hallo、guten
Abend。（ドイツ語）

今回は走ってはわかりです。

雄二は何か気になっている様子だったけど……？

次回をお楽しみに！

バカテスト「数学」

$x(2 + 3y) - y(5 - 2x)$ を解きなさい。

鹿目まどかの答え

「 $2x - 5y + 5xy$ 」

教師のコメント

正解です。特に問題ありません。

美樹さやかへの答え

「 $2x + 5y - 5xy$ 」

教師のコメント

符号間違いですね。よくある間違いですが、見直しをして
おきましょう。

土屋康太の答え

「これを解けば世界が滅んでしまっ」

教師のコメント

では今ここにいる私は何なのですか。

吉井明久の答え

「この世には解けないものがいくつもある」

教師のコメント

カッコいい決め台詞だと思いますが、今がその時ではない
はずですよ。

バカテスト「数学」(後書き)

今回は数学です。

皆さん知っての通り、僕は成績は悪い方で、合っているとは思いますが、間違っていたら報告お願いします。

それでは、次回もお楽しみに！

学園長と脅迫状と学園の危機（前書き）

諸注意について。全略。

学園長と脅迫状と学園の危機

4時間目も無事終わり、雄二は教室からさっさと出て行く。さて。それじゃ、僕も行きますか。立ち上がり、僕も教室から出て行くこととする。

「明久君。どこに行くんですか？」

姫路さんに止められて立ち止まる。事情は説明しない方が良さそうかなあ……。

「雄二と少しね」

とりあえず、学園長に会いに行くことは言わない方がいいだろうから、誤魔化しておかないと。

だけど、姫路さんは恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めた。はて？ 僕何か変なこと言ったかな？

「あ、あの……明久君！」

「あ、うん」

少し緊張が走る。どうしたんだろう。何か大切な話でも

「あ、明久君がそういうことするのはダメだと思いますっ……！」
「物凄い誤解が起きてるっ……！」

一体どうしてそうなったのだろうか。やっぱり姫路さん、Fクラスに毒されてきているのかな……？

と、一人心配しつつ誤解をどうやって解こうか悩んでいると、遠

くから雄二の声が聞こえてきた。

『おい明久！ 早く行くぞ！』

そうだった。早く行かないと、昼休みが終わってしまふ。

「それじゃ、急ぐから」

今だ火照ってる姫路さんと別れ、雄二のもとに行つた。

「邪魔するぞ」

「失礼しまーす」

学園長室のドアを開けて、僕と雄二は堂々と中に入る。

「お前らはとうとうノックも出来なくなったのかい……？」

要らぬ心配だ。

「おいババア。今回はどうした？」

雄二がいつもの口調で学園長に問う。

「どうしたって、何がだい？」

「とぼけるな。昨日からのことだ」

「と、いうと何さね？」

「前触れもなく昨日から教師どもは変わるわ、自習になるわばっか
だったら、幾らなんでも不自然だと思っただろうが」

「ちゃんとわかってるみたいだね」

「一体何の用だ？」

話についていけない。二人は一体何を話しているんだろうか。昨日の教師入れ替えばかりかだつてことはわかるけど。

「Aクラスと戦えといったらどうさね？」

「何を隠している」

え？ Aクラスと戦う？ どうして学園長の口からそんな口が出るんだ？

「中学どもの勉強意識を高めてほしいのさ。この短い期間だからね。この学校のシステムを思う存分に使ってほしいという配慮さね。ただでさえ評判が落ちてるんだから、これぐらいしてもらわないとね」

多分嘘だろう。学園長がそんな心づかいの利いた人物ではないはずだ。

「試召戦争は俺らの意思で決めるもんだろう？ それに負ける可能性の高いFクラスに、そんなことを学園の長であるあんたが進めるとは、どういうことだ？」

「だから言ってるじゃないか。勉強の向上と、評判が落ちて」

「本当のことを言ったらどうだ？」

「……………」

学園長が思案顔になった。どうやら雄二に押されて、どうするか考えているようだ。

「わかったさ。正直に話そうじゃないか。あまりこつこつことを公表したくないから言いたくはないんだけどねえ……」

何やらトラブルでもあったのか？

「昨日の2時限ぐらいに脅迫状が届いたのさ」

「脅迫状？」

「こんなよぼよぼババアに脅迫状が送られてきた？ けど、どうしてまた？」

「ババア長。まさかまた何かやらかしたんですか？」

「失礼なこと言うんじゃないよ。私は何もしていないさね」

じゃあ何で脅迫状なんか届いたんだ？

「これがその内容さね」

学園長が机の引き出しから一つの茶筒を取り出した。

「えーと、何々……」

雄二が茶筒を開けて、手紙の内容を見ている。

「なるほど。なんともバカらしい内容だな」

雄二から手紙を受け取り、脅迫状の内容を見た。

《学園の悪評を流されてほしくなければ、試召戦争でFクラスを始

末世よ》

確かに、僕が見てももバカらしい内容だっていうことはわかった。僕は茶筒と一緒に学園長に返した。

「確かにこんなバカげた茶番みたいなものに付き合ってる暇はないんだけどね。お前らが学園の評判を悪くしたせいで、結構追い込まれてるところもある。もし本当に醜聞が世間に知れ渡るようなことがあれば、本当にこの学園は潰れるかもしれないのさ」

うん。どういうことが全然わからない。

「つまり、ババアは脅迫状が本当かどうかわからないので、脅迫状の指示に従うしかない。とりあえず、Fクラスを負けさせるには、Aクラスしかないと思った。それを告げるために俺たちを遠まわし……つまり、教師どもを動かして俺たちをここに来させるようにした。そういうことだな？」

と、雄二が僕にもわかり易いようにまとめてくれた。わざわざ教師を使ってまでやることなのかな？ 普通に呼べば バレる可能性があるからそこまでやったのか。

「そういうことさね。できれば調べられる余裕があればいいんだけどね。でもそんな時間はない。つまり、あんたらはAクラスに負けてほしい、教育方針に逆らうことになってしまっけどね」

と、学園長は教育者が言う言葉じゃないことを堂々と僕らに告げた。

なるほど。ようやくわかった。そういうことか。

「お断りします」

僕ははつきりと断った。そんな八百長みたいな真似してAクラスに負けたかない。

「明久の言うとおりで。俺たちはAクラスに負けるつもりはない。無論勝つ。絶対にな」

「言うと思ったさ。じゃあ何か当てはあるのかい？」

どうやら予想の範疇だったらしい。正直、こんな話を聞いたら茶化すことは出来ない。僕はこの学校から転校したくはない。

「Aクラスの動きが気になる。もしかしたら今回の件に関する事情があるかもしれないからな。ムツツリーニ 土屋康太にこのことも兼ねて調査してもらおう」

「できればあまり他人に知れてほしくないんだけどねえ……」

「今はそういつる場合じゃないでしょ？ ババア長」

「まあ、そうさね。この際警沢は言わない。だけど、あまり人目につかせるんじゃないよ」

「あいよ」

「りょーかい」

僕らは適当に返事を返して学園長室から出た。

それにしても、つくづくこの学園は危機に瀕してるなあ……。

学園長と脅迫状と学園の危機（後書き）

何か今回は真面目です。

次はいつも通りに戻す予定です。

次回もお楽しみに！

DクラスとFクラスの試召戦争（前書き）

二次作品。原作じゃないと嫌！って方。ユーリターンをオススメします。

神なる裁きを受けるのは君ですから（笑）by FFF団

DクラスとFクラスの試召戦争

『吉井！ そろそろヤバくなってきた！』

「Aチーム一旦下がって！ Bチーム応援して！」

僕は学園長の話を終えて、雄二はFクラスに戻ってすぐに作戦を告げた。

作戦はこうだ。5人ずつの10チーム+2チーム（体験授業生）を作って攻める作戦だ。

ただし、姫路さん、雄二、ムツツリー二は入れないこと。教科は得意な教科同士を集める。点数が減ってきたら、いったん引いて、補充テストを受ける。それを繰り返すのみ。

ムツツリー二は霧島さんと学園長の脅迫状の件について調査をしている。

姫路さんはどうするかは聞いていない。雄二は教室で待機している。

『ヤバい！ 予想以上に点数を減らされた！』

そんな事を考えるよりも戦闘を重視しないとやられそうだ。

「CチームはBチームの援護！ DとFチームはその場で待機！」

点数が減ってきたら交代して、他のチームが待機。そしてテスト補充という繰り返しだ。点数がある程度高いEチームとJチームはFクラスで待機している。

ついでに僕はFチーム。悪意にしか感じない。

だけど、これだけで相手を倒せるとは思えないから、多分まだ作戦の本部分は言っていないだろう。

『くっ……！ 時間稼ぎか……これじゃなかなか追い込めねえ！
応援を呼んでくれ！』

Dクラスの一人の男子が悔しそうに言っている。
なるほど。時間稼ぎと見せ掛けクラスの連中を出してくるわけか。
その間に先回りして代表を追い詰め仕留める気か。雄二にしてはわかりやすい作戦だ。

「うまくいつてるわね」

と、Dチームに入る美波が僕に話しかけてきた。

「そうだね。このまま押し込めればいいんだけど」

「まだ始まったばかりじゃ。もう少し様子を見てからではないと」
「確かに油断はしない方がいいかもね」

一様、僕らは弱いクラスなのだから、相手の出方も窺っておかないとすぐにやられてしまう。

「結構本格的なんですね……」

僕と同じFチームにいた鹿目さんが関心している。確かにこの学校の勉強方針云々はユニークだと思う。僕も学費が安いからって理由でここに入れられたけど、嫌いってわけじゃない。何故好きじゃないかって？ 観察処分者だからさ。

『応援が来たぞ！』

Dクラスの方から声がする。どうやらDクラスの援護が来たらし

い。

『吉井！ そろそろBもCもヤバイ！』

「よし！ BとCチームは教室に戻って！ DとFチームは戦闘開始めるよ！」

『『『おおーっ！』』』

皆の音が一致して、すぐさまBとCチーム退却。補充テストに向かう。DとFチームは交代。GとHチームは後ろで待機。Aチームは補充テストが終わって既に戻ってきていた。

「頑張ります！」

鹿目さんのガッツポーズを少しほほえましく感じる。

「じゃあ行くよ！ 試獣召喚！」

『『『試獣召喚！』』』

皆が一斉に召喚獣を出す呪文を言うと、皆の足元に幾何学模様の魔法陣が現れ、召喚獣が出てくる。

「「え、どうしてこの格好に！？」」

『うわっどうなってんのこれ！？』

『これスゲエな！』

中学生の皆は召喚獣の出現に驚いてるようだ。

でも何故か取り乱している様子の鹿目さんと美樹さん。

美樹さんの召喚獣は前の魔女と戦った時と同じ格好だった。どう

やらそれで取り乱しているらしい。

てことは、もしかして鹿目さんも魔法少女なのかもしれない。そして二人を見ると、召喚獣の頭上に点数が出てくる。

『Dクラス 鈴井正樹 VS Fクラス 鹿目まどか

古典 59点 VS 18点

』

『Dクラス 中村正英 VS Fクラス 美樹さやか

古典 54点 VS 12点

』

流石腐っても（腐ってはなないけど）Fクラスになっただけのこと
はある。

『やっぱり時間稼ぎか！ 応援をもっと呼んでくれ！』

どうやら確信がついたみたいだ。Dクラスの生徒の何人かが戻っ
ていった。

さて、それじゃ戦闘に専念しますか。

『Dクラス 永沢正英 VS Fクラス 吉井明久

古典 71点 VS 8点

』

『 『 『 …… 『 『 『

周り全員が静まり返る。

「しょ、しょうがないじゃないか！ 僕が得意なのは日本史であつて古典じゃない！」

「アキつて本当バカね……」

「バ、バカつて何さ！ 僕はただ古典を勉強の範疇に入れてなかつただけで！」

「勉強さえ考えてないのもどうかと思つわよ……」

否定できない。

「じゃ、じゃあ美波は点数いくつなのさ！」

「少なくともアキよりはいいわよ！」

『Dクラス	篠原進	VS	Fクラス	島田美波
古典	79点	VS	4点	

』

「……………」

「謝らないでよ……」

「どうやらまだ日本語には慣れていないらしい。そう考えることしか自分にはできない。」

「皆！ 美波はおいといてさっさとDクラスやつつけよう！」

『『『貴様もじゃボケエ……！』』』

何故だ。何故僕は今怒られた。

「とりあえずウチたちは不利そうだからここから出よう」
「ではワシが応戦しんぜよう。試験^{サメン}召喚！」

『Dクラス 篠原進 VS Fクラス 木下秀吉
古典 79点 VS 43点
』

おおつ。少なくとも僕らよりも高い。

「って、関心してる場合じゃないか」

とりあえず、自分の頬を叩いて気合を入れる。
そうだな、時間稼ぎに一番頑張ってくれそうなのは……やっぱり
美波しかないかな。

「美波。数学の長谷川先生呼んできてくれないかな？」
「オーケー。どっちにしる古典じゃここにも役に立たないだけ
だしね」

と美波がささつと職員室に向かった。
後は時間を稼いでもらうしか残ってない。

「皆！ 油断しちゃダメだよ！ これでも相手は上位クラスだから
ね！」

『あたぼつよ！』

『俺たちが絶対に勝ってやる！』

『いくぞ！ 皆！』

『『『おおーっ！！』』』』

「秀吉！ あともうちよつと耐えてよ！」
「わかっておる！」

結構の時間耐えてもらったけど、そろそろ交代しないと戦死してしまうかもしれない。でも中途半端に交代してしまうと、次にまた古典になった時に応戦がきかなくなってしまうかもしれない。

後もうちよつと耐えてくれれば美波が数学の先生を呼んでくる。美波は数学は得意なので、とても戦力になる。

『0点になった戦死者は補習！！』
『い、いやだあああ！！ 助けてえええ！！』

Dクラスの人がどこからか現れた鉄人により地獄の馬車で補習室に連れて行かれる人も大勢いる。

この戦いの中だ。そりゃ一人や二人は戦死する。一樣こちら側は頑張っているけど

『くそっ！ やられちまった！』
『戦死者は補習！！』
『やめる！ 俺はあんな地獄には行きたくない！！』
『何を言う。補習室ほど勉強設備が整っている所なんてないぞ』
『嘘だ！ 鉄人と一緒に教室で受けたら うわあああ！！』

Fクラスの一人が連れて行かれたようだ。南無。
僕の隣で鹿目さんと美樹さんが身震いしているのが見えた。だよ
ね。

「明久よ！ まだ交代はできんのか！？」

どうやら限界が来たようで、秀吉が僕に助けを求めてきた。

「ごめん！ あともうちよっと踏ん張って！」

あともうちよっとで来るはずなんだ！

「アキ！」

美波の声がして後ろを振り向くと、美波とその後ろに数学の長谷川先生がついて来ていた。

「待ってましたあ！！」

美波の後ろに数学の長谷川先生がついて来ていた。

「えー、では召喚フィールドを展開します」

その言葉と同時に召喚フィールドが展開され、古典と数学に分かれた。

「皆！ 隣のフィールドに移って！」

美波とDとFチームが一気に数学フィールドに下がる。

「それじゃ、行くわよ！ 試験召喚！」
『教科が変わったぐらいで調子乗るなよ！ 試験召喚！』

Dクラスの人が数学フィールドにきて、こちらも数学にはかなり自信ありのようだ。

『Dクラス 佐々木明夫 VS Fクラス 島田美波
数学 102点 VS 253点

『なにー！？』

どうやら相当驚いてるようだ。無理もない。美波は数学だけはBクラス並だったけど、明らかに今の点数はAクラスに相当するだろう。そんな相手にDクラスが一人で勝てる相手じゃない。しかも美波だからね。どんな殺人法を使うか知れたもんじゃない。

「アキ。何か失礼なこと思わなかった？」
「全然っ」

なんとこの勘の鋭さだ……。いつも背筋が凍るように感じてしま

う。
「凄いですね！ 美波先輩って！」
「凄い点数ですね……」
「そ、それほどでもないわよ」

鹿目さんと美樹さんに褒められて少し照れてる美波。こっぴつとこころは可愛いんだよなあ。

『応戦するわ!』

と、Dクラスの女子が出てきて召喚獣を出した。

『Dクラス 佐々木明夫 & 川崎紫暮 VS Fクラス

島田美波

数学 102点 92点 VS 2

53点 『

Dクラスなのに結意外点数が高い。美波だけでもいけそうな気がするけど、難しいかもしれない。

『DチームとFチーム! 美波の援護に回って!』

『『『おおーっ!』』』

皆が美波の後ろに立ち、召喚獣を呼び出す。皆の点数は高くはないけど、十分な戦力にはなるはず!

『2対10人以上上つてありかよ!?!』

『卑怯よ!』

どうやらこの対戦方法に文句をつける気らしい。

『戦闘に卑怯もあるか! 皆! かけえ!』

『『『うおおおお!』』』

『何か、ウチらが悪者みたいね……』

『そう……ですね……ハハ……』

美波と鹿目さんが何か言っていたけど、別に気にすることはないだろう。

「そろそろヤバイわね……」

美波の数学の点数がいつの間にか50点ぐらいに減り、苦戦していた。さつきからチームも交代しているけど、流石に間に合わなくなってきた。

それに、さつきから全然攻め入る事ができないから、本当にヤバくなってきた。流石は上位クラスなだけある。

「相手クラスも10人ぐらいしか減ってないね……」

「そうじゃの……こちらは20人は補習室に連行されてしまっておるし、雄二の作戦が気になるところじゃの……」

「アキ！ そろそろ交代！」

「う、うん！ AチームとGチーム！ DチームとBチームと交代してー！」

段々と弱気になってきたFクラスの皆。そろそろ決着をつけないと負けるのも時間の問題だ。

「皆さんー！」

少し希望が薄れていって、早くも敗北を感じていると、Fクラスの方から美しい天使の声が聞こえた。この声は……まさか……！振り向くとそこには姫路さんが立っていた。まさに救世主！

「私も戦闘に加わります！ 試獣召喚！」

サモン

姫路さんの足元に魔法陣が現れる。そして姫路さんの召喚獣が出

現する。

『Dクラス 森川美里 VS Fクラス 姫路瑞希
数学 78点 VS 422点
』

『『『何だと！？』』』

皆が驚いている様子だ。どうしてだろうか。姫路さんがここに
いるのは当たり前のことなんだけれど……。

中学生の方々も皆姫路さんの強さに一目惚れしたようだ。
そう考えている内にDクラスの森川さんの召喚獣は消滅した。

『ウエルカム』

『いやあああ！ 鉄人の補習何ていやあああ！！』

鉄人に捕まり連れて行かれる森川さん。何だか同情してしまう。

『くそ！ すぐにDクラスから応援を呼べ！ 多くの人を集めるん
だ！ 何が何でもここは通らせない！』

どうやら作戦はうまくいってるみたいだ。この調子で進めば、D
クラスに近づける。

（あの、明久君）

（ん、何？ 姫路さん）

姫路さんが小声で話しかけられる。一樣小声で返す。何かあったんだろうか。

(あの……坂本君が私が応戦に向かったら明久君に、Dクラスに何が何でもこいつで伝えろって)

はて？ また何でそんなそろそろ決着つけるみたいない方は……なるほど、そういうことか！

「ありがとう！ 姫路さん！」

僕は姫路さんに握手をして、御礼をいった。

「は、はい！」

姫路さんが顔真っ赤にしたけど、とにかく今はDクラスに行かないといけない。そのためには……。

「CチームとEチーム！ 僕がDクラスに向かう！ Dクラスを避けて道を作って！」

僕は廊下中に響くぐらい大きな声で命令した。

『何かわからんが勝算があるみたいだな』

『でも、それだと少なすぎる。AとBチームも一緒に行け！』

『よっしゃ！ 吉井のために道を開ける！』

『『『応っ！！』』』

言っや否や皆が、人一人通れるぐらいの道を作ってくれた。まる

でドラマでもみてるみたいだ。

『くそっ！ 邪魔しやがって！』

『そこどけ！』

『そうは行くかってんだ！ 早く行け！ 吉井！』

「わかったよ！」

僕はFFフロードを走りぬく。Dクラスまで一直線だ！

Dクラスに着くとIチームとJチームが教室の前に立っていた。なるほど先回りしてたのか。

「よっ明久」

「うわぁ！」

背中の手をポンツと置かれびっくりする。誰だ一体！？

「何だ雄二か……」

まったく。何でこんな僕を驚かすことを、と言いかけた瞬間、疑問が浮かぶ。

なんで雄二がこんなところに？

「何で俺がここにいるかって顔だな」

どうやらよまれてるみたいだ。

「うん。確かルールでは自分の場所を明かさないといけないってル

「ルがあつたよね？」

「ああ。それは大丈夫だ。きちんと明かしている」

「へ？ いつの間に？」

「姫路が戦闘に入る時に紛れ込んだんだ」

「あれ？ じゃあ、何で誰も雄二って気づかなかったの？」

「一樣カツラしていたんだが、流星の連中も気づくはずだ。もうそろそろくるんじゃないか？」

反対にどうしてそこまで皆は気づかなかったのか気になる。

そして最後に一つ、気になったことを言う。

「それと、どうして僕の後ろに？」

「Fクラスの連中が道を開けた時に一緒に後ろに着いていった」

「ぜ、全然気づかなかった……」

いつからムツツリーニみたいな能力を手に入れていたんだ……。

「そんなことより、さっさと代表を片付けるぞ」

「くう…… 姫路は完全におとりだったのか……！」

代表の平賀君が悔しそうに呟く。

そう。僕らは相手を戸惑わせるための道具だ。

僕たちはFクラスの教室をこさせないように時間を稼ぐ。相手は時間稼ぎで、姫路さんがDクラスに一気に潰しにかかると考えさせるためだ。だけど、姫路さんをその戦闘の中に出せば更に戸惑い、Dクラスにとりあえず、姫路さんには絶対通さないようにする。つまり、Dクラスの強い奴をおびき出すということだ。そして先回りしていたIとJチームがそのことを知って戻ってくるDクラスを止めるという戦法だ。そこに僕も入ることになる。雄二が来たのは、こちらに入ること気づかせてその場で止めを刺すとかそんな感じ

だろう。

「んじゃ代表さん。これでおさらばだ。試獣^{サモ}召喚」

「お、俺だつて負けるか！ 試獣^{サモ}召喚！」

□	Dクラス	平賀源二	V S	Fクラス	坂本雄二
	数学	156点	V S	210点	

雄二の一撃で、Fクラスの勝利が決まった。

試召戦争が終わって30分ぐらいたった。

僕はいつもの畳と卓袱台の教室でいつものメンバーと鹿目さんと美樹さんの全員で雄二に訊いた。

「ねえ。何でまた教室を交換しなかったの？」

前に雄二はDクラスに勝った時、教室と交換の代わりに汚れ役を買わせた。それは次の戦争のためだったんだけど、今回はそういうのはなく、教室交換なし、汚れ役買わすのなしという、違和感しか残って仕方ない。何かあるのだろう。と思つてたのに

「ああ。特に意味なかったからな」

「意味がないってどういうこと？」

「この学校って、勝つたらクラス交換しないといけないんでしょ？」

「そんなのした方がいいじゃないですか」

美樹さんも話しに加わる。どうやら僕と同じ疑問のようだ。

「別に勝者が望めば交換はしなくていい。それと明久には前にも言ったが、あくまで狙うのはAクラスだ。Dクラスの設備で満足しちまって、戦うのはよそうってなったら、上手くコントロールできなくなる可能性がある。それにDクラスに行っても、別に変わらんしな」

「前は教室の交換の変わりに、要望加えたじゃないか。あれはどうしたのさ？」

「今回の戦争は単に中学生どもがある程度慣れさせる為にやったんだ。要望もなにもない」

「うーん……何か納得いかないなあ……」

どうも合点がいかない。まあ、子ども好きだからというところを出てるのかもしれない。

「別にいいじゃねえか。んなことより、Aクラスだ」

「そうだ。Aクラスの点数ってどれくらいあるんですか？」

美樹さんが気になった様子で雄二に質問した。

「そうだな。学年5位とかに入る奴は平気で400点以上のとつてる奴はいるな」

「400点以上!?!」

物凄い驚いてるようだ。無理もないか。

「そんなんで勝てるんですか!?!」

「そうですね。絶対無理ですよ……」

確かに僕らにもAクラスに勝てる余地なんてないと思う。それで勝てるとしたら……。

「また一騎打ちでもするの？」

「その通りだ、明久」

それぐらいしか勝てるとは思えないから答えただけだけど。

「え？ でも、試召戦争はクラス全体でやるもんじゃないの？」

「別にテストの点数で競うのであれば何でもいい」

「そうなんですか……」

納得を入れた二人。

ガララッ

「……………」

教室の引き戸が開き、そこにはムツツリー二いた。足音を立たずに雄二の元に行き、耳元で何かを呟く。慌ててるみたいだけど、どうしたのかな？

「……………やっぱりあいつらか」

何やら納得が言った顔だ。もしかして脅迫状の犯人がわかったのかな？ 雄二に聞こうとしたけど、やめた。脅迫状の内容を他人に

バラまいたらいけないって言うし。前にも同じことがあったから、それぐらいは勉強してる。

「まあ、そうくるわな」

整った顔立ちで僕ら全員を見渡す。

「明日の朝にでもAクラスがFクラスに宣戦布告するらしい」「なにい!?!?!」

美樹さんが驚いた様子で言う。

「雄二よ。一体どういうことじゃ。どうして明日なのじゃ? Aクラスの霧島がFクラスに戦線布告を申し込むのはもう少し先のものだ」と承知しておいたのじゃが」

「それは明日の昼休みにでも伝える。今日は勉強に勤しめ。それ以外は今を考えるな。といっても難しいだろうが」

「そりゃそうよ。いきなりAクラスがウチらに戦いを挑むのって、意味がわからないわよ」

「もしかしたら、一騎打ちじゃ無理の可能性もある」

「そんな……いきなり400点以上の相手と戦争するなんて……」

「すまんが、今は詳しい話は出来ない。明日にしてほしい」

「まあ、そこまで言うなら仕方ないか……」

これは、思っていた以上に大変なことになりそうだった。

DクラスとFクラスの試召戦争（後書き）

ふう……終わったよ……

話が難しくなると考えないといけないから尚難しい。
何だか数学の問題を解いてるみたいだった……

一樣、矛盾してる点はないと思います。多分ね。

ではまた次回

バカテスト「歴史」

次の（ ）の中に語句を入れなさい。 同じ語句を入れてもかまいません。

500万年前に人間の先祖といわれる（ ）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（ ）という移動方法を身につけました。（ ）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（ ）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（ ）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（ ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（ ）という。

姫路瑞希の答え

500万年前に人間の先祖といわれる（ 猿人 ）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（ 直立二足歩行 ）という移動方法を身につけました。（ 猿人 ）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（ 打製石器 ）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（ 旧石器時代 ）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（ 磨製石器 ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（ 新石器時代 ）という。

教師のコメント

正解です。やはり姫路さんには簡単すぎましたかね。

島田美波の答え

500万年前に人間の先祖といわれる（ バカ ）は、草原の環境

に適して、二本足で歩く（二本足歩き）という移動方法を身につけました。（バカ）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（鈍器）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（旧鈍器時代）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（魔法ステッキ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（新時代の幕開け）という。

教師のコメント

どれだけ恐ろしくてミラクルな時代だったんですか。

鹿目まどか

500万年前に人間の先祖といわれる（サル）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（直立二本足歩き）という移動方法を身につけました。（猿人）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（打制石器）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（旧石器時代）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（魔法石器）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（真の石器時代）という。

教師のコメント

変な間違いが多いですね。なぜ「人間の先祖は（サル）」と書いてるのに、三つ目の（）で「（猿人）は手を使い」のところで当ててるのが気になります。何か勘違いしてしまったのだと思っておきます。

土屋康太の答え

500万年前に人間の先祖といわれる（サル）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（直径2センチの歩み）という移動方法を

身につけました。(猿人)は手を使い道具を作り、石を打ち割って(打製石器)もつくり、採集や狩りを行っていた時代を(サルの惑星)という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、(魔法道具)や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を(人類の勝利)という。説明が足りないと思う。

教師のコメント

一体私たちの過去に何があったのですか。ミラクルすぎます。というかあなたのせいで鹿目さんの答えがおかしくなったのですか？

吉井明久の答え

500万年前に人間の先祖といわれる(雄二)は、草原の環境に適して、二本足で歩く(バカの二足歩行)という移動方法に身につけました。(雄二)は手を使い道具を作り、石を打ち割って(頭を粉々にしたい)もつくり、採集や狩りを行っていた時代を(雄二撲殺日記)という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、(雄二動物化)や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を(雄二殲滅時代)という。

教師のコメント

人の悪口をテストの用紙に書いて提出するとは如何なものかと思えます。後で職員室に来るように。

坂本雄二の答え

500万年前に人間の先祖といわれる(アキちゃん)は、草原の環境に適して、二本足で歩く(女装四足歩行)という移動方法を身につけました。(バカ)は手を使い道具を作り、石を打

ち割って（ 明久の頭に投げる ）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（ バカ撲滅運動 ）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（ アキちゃん ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（ 汚物発生事件 ）という。

教師のコメント

あとでアキちゃ

吉井君と一緒に職員室に来るように。

玉野美紀の答え

500万年前に人間の先祖といわれる（ 二人組み ）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（ 見つめ合い ）という移動方法に身をつけました。（ アキちゃん ）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（ ボーイズラブ ）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（ 雄二狩り ）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（ 真心込めた物 ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（ 愛し合う二人 ）という。

教師のコメント

一体彼等彼女等に何があったのですか。

暁美ほむら

500万年前に人間の先祖といわれる（ まどか ）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（ 魔女 ）という移動方法を身につけました。（ 人々 ）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（ ソウルジェム ）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（ 魔法少女時代 ）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（ グリーフシード ）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（ 魔女時代 ）という。

教師のコメント

正直、何でAクラスにいったか不思議でたまりません。

美樹さやかへの答え

500万年前に人間の先祖といわれる（バカ）は、草原の環境に適して、二本足で歩く（異端審問会）という移動方法を身につけました。（悪魔）は手を使い道具を作り、石を打ち割って（大鎌）もつくり、採集や狩りを行っていた時代を（FFF団の始まり）という。今から1万年前に農耕や牧畜がはじまり、（恋愛関係を気づくものに罰）や土器のほか、衣服もつくりはじめました。この時代を（FFF団創設）という。

教師のコメント

次の生徒は職員室に来るように。

「吉井明久、坂本雄二、土屋康太、島田美波、鹿目まどか、美樹さやか、玉野美紀、暁美ほむら」

バカテスト「歴史」(後書き)

何か珍回答者が今回多いです。8/9は職員室行きです。

歴史自体は難しくないのですが、文章作りがヘタでして、矛盾してないか心配です。

それと、とうとう1万PV越しました！

ではまた。

僕とテストと死刑判決

昨日は日本史とかの記憶力で決めていくことにし、昨日必死で勉強したんだけど、何を間違えたか、いつもは8時20分ぐらいに起きるんだけど、目覚ましが7時に設定されていて、その7時30分のアラームで目を覚ました。

家にいて勉強するのもいいけど、登校中に忘れてしまつかもしれなかったし、学校に着いてから勉強を始めることにし、ただ今朝早々の登校中である。

でも、いつの間に時計セットしたのかな……？

まあ、こんなことを考えていてもわからないし、今は日本史の暗記した所をもう一度思い出そう。

えーと、確か地面を掘り下げて床にして屋根ををわらでかけらのを竪穴住居で、縄とかを使って模様を作った土器を縄文土器。そして、その時代を縄文時代だったけ。

とりあえず、昨日自分が必死に覚えたやつを色々引っこ抜いていく。

「吉井さん！」

「ん？」

心を安らげるような声で僕の名前を呼ばれた。誰だろうか？

んな時間に いや、この時間だからあたりまえか。

振り向いてみると、その声の持ち主は鹿目さんだった。

「おはよう。鹿目さん」

「おはようございます。吉井さん」

笑顔を向けて挨拶を交わす。ちゃんと挨拶をして、偉いなあ……

「今日は吉井さん早いんですね」

遅刻常習犯と見られていたようだ。

「まあね。今日はテストだから」

「そうですね……」

少しの沈黙。

「あの、吉井さん」

「ん、何かな？」

少し俯いて言ってくる。どうしたんだろう。少し赤くなってる。

「あ、あの……」

「な、何？」

熱でもあるのかな？ でもそんな調子ではなさそうだし、もしかしたら、何か不安でも抱えているのかもしれない。まだわかったわけじゃないけど、彼女も魔法少女だったら、そういうストレスを打ち明けたいという気持ちがあるかもしれないし。

「吉井さんの……その……」

でも、僕が魔法少女のことを知ってるとは鹿目さんは知らないかもしれない。だとしたら他に何が考えられる？

「吉井さんのことを……」

もしかしたら好きな人の話かな？ いや、でもその可能性はないか。それだつたら美樹さんに言うだろう

「吉井さんのことを、明久君って言っても良いですか！」

「ふえ？」

考えていたことと全然違つて啞然とする。えーと、僕のことを名前で呼んでいいかつて鹿目さんが言ったんだっけ？ ……もしかしたら、彼女にこっちの学校への距離感を感じていたのかな。別にそんなことはなかったと思うけど、もしかしたら彼女はそうだったのかも知れない。なら、安心させてあげるのが今の僕の役目かな。

「うん。良いよ。それじゃ僕は鹿目さんのこと、まどかちゃんって呼んでいい？」

「！ は、はい！」

まるで天使の様な笑みを僕に見せ付けてくれた。素直だな、と思つていたその矢先、

「殺気っ！」

僕はかな まどかちゃんと一緒に咄嗟にその場から離れた。

そこには拳こぶしを地面に叩きつけている須川君がいた。僕の目の錯覚じゃなければ、今地面がひび割れて煙が上がっているのが見える。

「ミセツケテクレルジャネエカ、アキヒサクン？」

やばい。須川君の目が尋常じゃない。殺し屋よりも恐ろしい目を

している。

「逃げるよ！ まどかちゃん！！」

「はいっ！」

涙目のまどかちゃんと一緒に逃げる。もう死ぬ気で走る。

「ニガスカヨボケガア！！」

須川君の口調が悪魔のささやきに聞こえる。

ええいっ！ どうする吉井明久！ どうやったら奴から逃げられる！！

「コロシテシマエバスベテカイケツ……コロシテシマエバスベテカイケツ……」

ダメだ！ あんな常軌を逸してる奴あいてから逃げれる策なんて思いつかない！

「どうしよう！ どうしよう！」

泣きながら走ってるまどかちゃん。こんなに怖がっているのに僕は逃げているだけでいいのか。僕はそんな弱い男なのか！ そうだ！ 男なら女の子を守れ！ それが男つてもんだろ！ 吉井明久！

「まどかちゃん」

「ふえ……?」

まどかちゃんが泣きながら僕を見つめる。

「まどかちゃんは先に行つて。僕が奴を食い止めるから」

「そんな! そんなことしたら明久君は……!」

「大丈夫。僕はいつを止める。気にしないで学校に行つて」

「で、でも……」

「いいから」

「そんな……」

「早くっ!」

「……………!」

まどかちゃんは決心したようで、僕を見て頷く。僕も頷き返し、そして僕は咄嗟に後ろに振り返る。

「大丈夫。君は僕が守るから」

そして僕は悪魔を倒すために戦闘の態勢をとる。

「さあ、かかって来い!!」

「Destroy……」

僕に怖いもの何て

「ハカイカンリョウ」

今日の須川君の拳は、人間を超えるぐらいに相当すばかった。

「あれ……ここは……？」

保健室？ 何でここに……？

「っ！」

頭が凄い痛覚が通る。どうやら僕は頭をやられたらしい。須川君と対峙したぐらいしか覚えてないけど……。

ん、それにしても、何か、やけに足が重い。僕は気になって頭を上げる。

「スー……スー……」

そこには僕を看病なのか、まどかちゃんが寝ていた。

「ふえ……？」

目が覚めて、目をこすって、僕の方を見る。

「……………！」

僕が目を覚ましたのを見て泣き出して僕に抱きつく。やだな。これじゃあ僕が泣かしてるみたいじゃないか。

僕はどうしようかと考えて、とりあえず、まどかちゃんの頭を撫でて落ち着かせてる。

「よかった……本当によかった……」

いや、そこまで心配しなくても大丈夫だと思うけどな……。
それを数分やっている、保健室の扉が開いた。

「おお。大丈夫じゃったか。明久よ」

秀吉が保健室から入ってくる。

「あ、起きたのね。アキ」

「よかった。大丈夫でしたか……」

「よかった……吉井先輩が無事で」

「おお明久。生きていたか」

「……………無事で何より」

「吉井君。大丈夫だったかい？」

続けざまに美波、姫路さんと美樹さん、雄二とムッツリー二に、
何故か久保君が入ってくる。

「うん。大丈夫だよ」

「そう。ならよかった」

美波が安堵して胸をなでおろす。

「明久君が保健室に行っただって聞いて、ビックリしたんですからね
！」

姫路さんが怒りっぽく言う。何だか今日の姫路さんは可愛い。

「そうだと明久。まったく、お前は懲りないな」

「そうじゃぞ。テストの日に怪我をするなどは、言語道断じゃ」

「……………心配をかせさせる」

「でも、吉井君が無事で何よりだよ」

「本当、吉井先輩って心配させますね」

雄二たちが僕に心配をかけてくれる。そうか。僕にはこんなに優しい人たちに囲まれてたんだな……………。

「あのね……………アキ……………こんな時に言うのもなんだけど……………私、アキのこと好きなの！」

「ほええええ！？」

何だいきなり！？ どうして美波が僕に告白なんかを！？

「私も前から好きでした！ 付き合ってください！ 明久君！」

何だ！？ 姫路さんも僕に告白！？ どうなってるんだこれ！

「明久、実は俺もお前のことが……………好きだったんだ」

いや、別に雄二はいらない。

「実は、ワシもなんじゃ！」

「……………俺もずっと前から好きだった……………」

「私も吉井先輩と会った時から……………」

「僕も、君に好きになってしまった。何て罪深いんだ。僕っていう男は」

何か続けざまに告白される。なんだこれ！ 夢か！ 夢なのか！？

「私も……」

まどかちゃんが顔を上げて潤んだ目で僕に言う。

「私も明久君が」

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは何だ！』

『『『愛^{あい}を捨て、哀^{あい}にいきるもの！』』』

『宜しい！ ではこれから 一・F 異端審問会を開催する！』』

目を覚ましたら、そこはサバト会場だった。前にも似たようなこと
と言った気がする。

あれ？ てことは、もしかして、さっきみてたのって……夢？

まあ、そりゃそうだよな。あんな大勢に僕が好かれるわけないじ
やないか。特に男ども（秀吉は秀吉）。

『須川会長。吉井被告が目を覚ましました』

『そうか。ではさつさと罪状を読め』

『はつ。須川会長。えー、被告、吉井明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、我等が教理に反する疑いがもたれる。甲の罪状は強制猥褻わいせつおよび背信行為である。本日未明、見滝原中学2年体験授業により振り分けられた鹿目まどか（以下、この者を桃色ガールとする）に対して強制的に性的言動を求める猥褻行為を働いていたところを、須川会長が罰を一時的に与え確保。現在に至る。今後、甲と桃色ガール関係に対して』

『御託はいい。さつさと結論を述べよ』

『名前で呼び合う仲の女友達を中学生にまで作ってることが羨ましいです！』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

まさか、名前を呼び合っただけで怒ってるのか？

「ちよつと待つてよ！ そんなことぐらいで審問会にかけるのはおかしいよー！」

「黙れ！ 貴様ほど羨ましくて嘆かわしくて妬ましい奴は俺は見たことがない！」

「じゃあ、他の皆はどうなんだよ！ 名前で呼び合うことなんて、普通じゃないか！」

「……………」

少し思案顔を浮かべる須川君。

「それもそうかもしれん。確かに女友達から名前を呼ばれるくらい

で異端審問会を開くものではないかもしれない」

「そうでしょ！ そうだよね！ そううごとっていつかは訪れるもんね！」

「そうだな。わかった。では吉井の刑は45度斜めチョップ1発だ」

良かった。とりあえず僕の罪は軽くなった。

「それではいくぞ」

須川君が手を45度程度まで手を上げる。

シュツ（須川君が手を振り下ろす音）

ボゴツ（僕の頭にチョップがめり込む）

ドタドタツ（僕が痛みของあまりに悶えてる音）

「いつだああああ!？」

どんだけ強い力を入れたらここまで痛くなるんだ!？

「これだけで住んだと思えば軽い罪よ」

「ぎゃああああ!！」

やっぱり、さっきの暴行だけじゃ足りなかったのか、今畜生!

「それでは、これにより異端審問会は閉会する」

これにて、僕への処刑は終わりを告げた。

僕とテストと死刑判決（後書き）

何だか話が飛んでいるような気がします。
今回はとにかく色々やばくしてみました。
次回も似たような回にです。それでは
Goodbye!

変態と暁美ほむらと毎日逃走中（前書き）

みんな『『『マツミさん!!!!』』』

マミ 「はい！ バカと魔法少女と召喚獣、はっじまゝるよー
」

変態と曉美ほむらと毎日逃走中

異端審問会が終わってすぐにチャイムが鳴りテストに入った。
一時はどうなる事かと思っただけ、何とか助かった。
そしてあつという間に昼休みに入った。

「ようやく飯だな……」

雄二が伸びをして言う。

「今日は本当疲れるね……」

「当たり前だこれでも二つ上のクラスを相手したんだ。点数の消費
が大きいのは当たり前だ」

確かに昨日はかなりの攻防戦だった。主にこちら側が押され気味
だった。消費点数が大きいのは当たり前前の結果だ。

「そっぴや雄二よ。昨日の作戦とやらはどうするのじゃ」
「……………気になる」

秀吉とムツツリー二が弁当を持って僕らの会話に入ってきた。

「ああ。一樣一騎打ちでやるには変わらない。ただ、向こうが承諾
してくれるかが問題だ。一樣脅してでもやるが、一騎
打ちが無理なら、勝てる可能性はかなり下がる。そこらの作戦はど
ちらか決まった時に言う」

どうやら今回は一騎打ちが出来るか難しいみたいだ。

「まあ、今んと頃は向こうの動きは変わらないはまだ。下手に動く
と火傷だけじゃすまない」

「そうあ……確かに下手に打つと、返り討ちに合うのはよくある」
とじゃしの……」

「まあ、今はご飯にしよ。腹が減っては何とやらだしよ」

「……………腹の虫がなる」

「そうだな。さっさと飯にするか」

雄二はカバンから弁当を取り出す。

「私達を抜かないでよ」

「そうですよ」

姫路さんと美波がこっちに来る。

「ごめんごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど」

「別にそこまで怒ってませんよ」

やっぱり姫路さんは優しいなあ。

「吉井先輩。私達も混ぜてもらっていいですか？」

僕の後ろにいつもの笑顔で話しかける美樹さんと、その後ろで恥
かしそうにもじもじしているまどかちゃん居た。

「うん。いいよ。別に減るものでもないし」

「だってさ、まどか！」

「ちよ……………！ さやかちゃん！」

まどかちゃんが顔を真っ赤にして美樹さんに怒鳴る。

「別に恥かしくがらなくてもいいのに。僕達友達じゃないか」

「……………」

まどかちゃんが更に顔を真っ赤にする。あれ？ 僕何かまずいこといった？

「いつ見ても明久は恐ろしいな」

「そうじゃな。度肝を抜かれる時もあるぐらいじゃ」

「……………鈍感」

「え？ 何？ どうしたの？」

いつもの三人が変なことを言う。僕、鈍感で恐ろしくて度肝まで抜かれるようなことしたっけ？

「明久君は別にそうじゃない……………明久君は別にそうじゃない……………」

「アキ……………もしまどかに手をだしたら……………」

何か姫路さんと美波からとてつもないオーラが出ている。目をあわしたら殺されそうなくらい強いオーラが。

「そつだ。忘れてました」

姫路さんは立ち上がって、自分のカバンを探る。嫌な予感がする。

「実は今日、お弁当を作」

「それじゃあ、手洗ってくるね」
「まあ待て明久」

雄二がこれ以上にないくらいの強さで僕の肩を掴む。

「どうしたの雄二。僕は今すぐにでも手を1時間ほど洗いに行きたいんだ」

「そんなに洗ったら手を傷めるぞ。それに姫路の話は終わってねえ」
「何を言うのさ雄二。僕はただ手を洗いたいだけ……っ！」
「洗いに行くのは後で十分だ……っ！」

僕は雄二の腕をどかさうとしてるけど、全然動かない。くそ！
無駄に鍛えやがって！

「あの……私、今日お弁当を作ろうとしたら失敗しちゃって、お母さんが作り直してくれたのが多すぎて、それを皆に分けようかと思っただけですけど……」

「「よろこんで食べよう」「」

僕と雄二は仲良く肩に手をかけて姫路さんに言う。

「皆さんもどうですか」

「そうじゃな。ワシも貰おうかの」

「……大歓迎」

「ウチも貰っていいわよね」

「あたしもほしい！」

「私も食べてみたい……」

「はい。それじゃあ、皆さんで食べましょうか」

姫路さんが笑顔で言う。その笑顔の隣には5段の重箱があった。
……………今日はお正月じゃないよね……………？

とりあえず、僕は手を洗いに教室から出てトイレに行った。

蛇口を空けて水を出して手を洗う。洗い終わったら蛇口を締めて、手を洗った水滴をハンカチでふき取りながら教室に戻ろうとしたら、一人の黒髪の少女が僕の前に立った。とりあえず、横を通ろうとしたものの、すぐ僕の前に立つ。……………何だかその子から妙な気配を感じる。

とりあえず、僕は早く教室に戻りたい。どいてもらわないと、ご飯が食べれなくなるかもしれない。

「あの、そこ、どいてもらえるかな？」

「嫌よ」

僕は生まれてこのかたどけと言ってどいてもらった例ためしがない。かもしれない。

「あなたに話があるの」

「話って、何かな？」

できれば早く終わらせてほしいところだけど。

「あたはと鹿目まどかの関係って何なの？」

「ほえ？」

まった予想斜め上の質問が帰ってきた。

「あの……君は……？」

「自己紹介が忘れてたわ。私は暁美ほむら。見滝原中学2年よ。クラスはAクラスよ」

「ああ、僕は吉井明久です……Fクラスです……」

何だが、不思議なオーラを放ってる人だなあ。まるで僕らなんかよりも大人な感じた。

「話を戻すわ。あなたは、鹿目まどかとどっいう関係なの？」

「いや、ただの友達だけ……」

「本当にそうなの？」

「え、うん……」

何だがFFF団という単語が過ぎった。

「そう……ならいいわ」

暁美さんはまどかちゃんとはどっいう関係かわからないけど、今は気にしないでおこう。

「時間をとるような真似してごめんなさい」

暁美さんが道を開けてくれる。

僕はそこから逃げるように立ち去る

『確か、鹿目まどかだっけ。何か吉井と今朝登校してたんだっけ』
『そうそう。俺達も吉井を殴り飛ばしたいぐらいムカつく話だぜ』

「誰が通っていいって言ったかしら」

くっ………！ 何故僕が逃げるとわかった！

「お願いどいて！ 僕は早く行かないといけないんだ！」

「あなたとまどかが仲良くなった時点であなたに生きるという選択肢はないわ」

「くそっ！ どうして僕の周りには恐ろしいことを平気で吐く奴が多いんだ！」

こっぴなったら………！

「あ！ あんなところに鹿目まどかちゃんか！」

『『何だって（何ですって）！？』』』

さつき通りかかった男二人と暁美さんが窓の外を見る。
僕はその隙にFクラスに猛ダツシユする。

「あ、待ちなさい！ 吉井明久！」

「暁美さんが僕が逃げてることに気づいてこっちに向かってくる。」

『つんだと！？』

『おい！ あいつとっ捕まえてさっさと殴ろっぜ！』

どうやら敵が二人増えたみたいだ。

「くそおおおおっ!!」

誤算だった。そりゃ、さっき話してた人がすぐそこにいると知ったら、変態ならすぐに食いつくに決まってる。

「止まらないと殺すわよ!」

「待ちやがれ吉井!」

「今すぐ俺達の手で殺めてやるからよお!」

僕は必死こいてとにかく全力で逃げた。

変態と暁美ほむらと毎日逃走中（後書き）

今回は少し期間が長くあいてしまい、申し訳ありませんでした。
次回も遅くなるかもしれませんが、お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1161y/>

バカと魔法少女と召喚獣

2011年12月19日03時29分発行